

記	書	副官	隊長

米國潜水艦ノ襲撃法並ニ避退法ニ關スル事情報

昭一八 七〇二五
 軍令部資料
 參謀本部復寫
 昭和十一年七月十日
 渡集團司令部復寫

0072

米國潜水艦ノ襲撃法竝ニ避退法ニ關スル
一情報（出所南西方面艦隊司令部）

第一 夜間襲撃法

一 敵發見法

見張及電波探信儀ヲ併用ス狭視界ノ場合ハ電波探信儀ハ極メテ有
效ナルモ視界良好ノ場合ハ一艦ニ見張員ガ先ヅ最初ニ目標ヲ發見
スルヲ例トス見張員ハ一直三乃至四名ニシテ普通ノ六倍乃至七倍
眼鏡ヲ使用ス

二 接敵法

目標ヲ發見セバ電波探信儀ヲ全艦活用正確ナル側のヲ行ヒツツ高
速ニテ接敵運動ヲ行フ

新式潜水艦ノ最大速力ハ二〇乃至二五節ニシテ艦ニ依リ二二節ノ
モノモアレバ二四節ノモノモアリ之レ同一設計ニ成ル姉妹艦ト雖
モ出來具合ニ依リ必ズシモ同一速力ナラザルガ爲ナリ

三 射撃

照準距離九〇〇乃至一八〇〇米

方位角九〇度

ヲ理想トス

尙斜進角度ハ何度迄可能ナルヤ不明ナルモ一八〇度ノ斜進ハ恐ラク不可能ナルベシ

四 發射雷敏

目標ノ種類及特ニ艦長ノ決心如何ニ依リ異ル從テ二本ノコトモアレバ二本ノ場合モアリト云フ尙艦長ニ依リテハ最初ノ魚雷ガ命中セザル場合ハ水上状態ノ儘連續發射ヲ行フコトアリ又一度潛航逃避シタル後再ビ浮上シテ發射ヲ敢行スル場合モアリ而シテ其ノ何レヲ選ブヤハ一ニ艦長ノ所信ト當時ノ状況ニ依ル

五 戰果確認法

艦長ニ依リ又情況ニ依リテハ發射後水上状態ノ儘ニテ戰果ヲ見届クルコトアルモ通常發射直後潛航逃避シ命中音及爆發音ニ依リ成否ヲ判斷スルヲ例トス而シテ爆發音ヲ聞キタル場合他ニ護衛艦等ナケレバ(聲音機及探信儀ニ依リ判斷ス)適宜浮上又ハ露頂潛航又

0074

ヲ行ヒ觀察ヲ確認ス

第二 晝間襲撃法

一 敵發見法

潛望鏡ト水中聽音機ヲ併用ス水中探信儀ハ有效距離小ナルヲ以テ敵發見後配員スルヲ例トス此ノ場合モ通例潛望鏡ガ第一ノ敵發見者ナルヲト夜間襲撃ノ場合モ同様ナリ

潛望鏡ニ依ル發見距離ハ目標ノ種別其ノ能ニ依リ一概ニ言フヲ得ザルモ概ネ九〇〇〇米前後ナリ

二 接敵法

晝間ノ接敵運動ハ夜間ノ夫レニ比シ潜水艦ノ水中速力ニ掣肘セラ
ルルコト大ナルヲ以テ比較的困難ニシテ往々ニシテ目標ヲ捕捉シ
乍ラ襲撃ノ機會ヲ逸スルコトアリ新式潜水艦ノ最大水中速力

(Emergency Speed ト稱ス)ハ十二節ナルモ此ノ速力ニテハ電力

消耗大ナルヲ以テ長續キセズ(航續時間不明)

三 最大射點襲撃ノ場合ト同様九〇度九〇〇乃至一〇八〇〇米ナリ

0075

(註) 平時演習ノ際ハ晝夜ノ別ナク照準距離一、四〇〇米以下ニテ發射ヲ行フヲ通則トセシモ開戦後ハ右ノ如ク九〇〇乃至一、八〇〇米標準トナシアリ

四 發射ノ際ハ聽音發射ノ場合ヲ除キ發射直前短時間潛望鏡ヲ露出ス一般ニ潛望鏡露出秒時ハ一〇乃至四五秒露出、高サハ三呎ナリ
五 港灣内碇泊中ノ艦船ヲ襲撃ノ場合特ニ長距離離走ノ魚雷ヲ使用スルコトナシ

第三 襲撃後ノ避退法

前諸項ニ述ベタルガ如ク潜水艦襲撃後一應潛航避退シ爆發音ノ有無ヲ聽取スルヲ建前トス此ノ場合潛航深度ハ連列四五米ナリ附近ニ護衛艦艇ナケレバ状況ニ依リ浮上(夜間)シ又ハ潛望鏡ニテ敵果ヲ確ムル等ノ方法ヲ採ルコト前掲ノ通ナルモ護衛艦艇ノ攻撃ヲ受クルカ其ノ虞レアル場合ニハ連列左ノ方法ニ依リ避退ス但シ此ノ方法タルヤ極メテ概念的ノモノニシテ艦長ノ決心如何ニ依リ一律ニ言フヲ得ザルコト勿論ナリ

43

0076

一 護衛艦アルモ比較的遠距離ノ場合

急速深々度潜航ヲ行ヒ或程度高速（短時間 Emergency Speed）ヲ使

用スルコトアルベシニテ退退セル後最微速約二節ニ減速避

退行動ス

二 爆撃攻撃ヲ受ケタル場合ハ急速深々度潜航（特ニ變針ヲ行フコト

ナシ）ヲ行フト共ニ敵ノ聲音ヲ困難ナラシムル爲極速力約二節ニ

テ適宜行動ス尙状況ニ依リ救急策トシテ發射管ヨリ適宜油、空氣

溢漏、木片、「キルク」等種々雜多ノモノヲ射出スルコトアリ此

ノ方法ハ既ニ前世界大戰當時獨潜水艦ノ採用セシ「トリツク」ニ

シテ別ニ新疎アルモノニアラスト請フ

三 最大安全潜航深度ハ七五米ナルモ艦長ニ依リテハ九〇米又ハ夫レ

ヨリ若干深々度延潜航スル場合アルベシ之全ク艦長ノ所信ニ依ル

モノニシテ数字的ニ云々スルハ困難ナリ

四 急速潜航所要時左ノ如シ

水上状態ヨリ全没マテ約五〇秒潜望鏡露出状態ヨリ最大安全潜航

0077

深度（七五米）迄約一分間（普通潜航ノ場合ハ三分乃至四分間）

其最速力（約二節）ノ最大航續時間ハ三十六時間ナルモ筋ル長時

間潜航ハ乗員ニ相等ノ苦痛ヲ與フ戰前ハ一年ニ一度一箇ヲ指定シ

テ右最大長時間潜航ヲ行ハシムルヲ列トセリ

右最速力ハ悉ラク兩舷機使用ノ場合モ出シ得ルモノノ如シ

六米國潜水艦ハ戀島潜航不可能ナリ

第四 探信儀及通信機當直法

一 對航空機用電波探信儀（水上潜航中共ニ使用）

陸岸ニ近ク行動ノ場合等敵機來襲ノ算多キ場合ニノミ使用ス當直

法ハ情況ニ依リ一定セス一分機キニ交互ニ使用スル場合毎時十分

間宛使用スル場合或ハ連續數時間使用スル場合等アリ「オベレ

ター」ハ全部電信員ナリ本電波探信儀ハ連續五〇—一〇〇時間使

用可能ニシテ部分品ノ交換ヲ要スル場合稀ナリ

二 對艦船用電波探信儀（水上ノミ使用）

本探信儀ハ第二ニ於テ述べタル如ク最新式種メテ濶可ナルモノニ

0078

シテ「オペレーター」ハ先任電信下士官一人ノミナリ

(潜水艦ニテハ人員ノ關係上先任電信下士ノ受持ナルモ水上艦艇ノ場合ハ電波探信儀學校出身者ヲ以テ充ツルヲ例トス) 從テ終夜當時之ニ配員スルコト不可能ニシテ通例視界不良ノ際ノミ連續使用シ其ノ他毎時十分間ノミ配員スルヲ例トス

又月夜等視界極メテ良好ナル場合ハ一夜ニ二回ノミ配員ス通例夜間最初ノ敵発見者ガ見張ナルコトノ一因ハ之ノ點ニアリ

本探信儀ハ七十二箇ノ電球ヲ有スルトコロ中七箇ハ消耗率極メテ大ニシテ概ネ每五時間位ニ一箇宛豫備電球ト換裝スルヲ要ス豫備電球ハ合計一五〇箇アルモ中七十二箇ハ全部電球一式ニシテ殘餘ハ全部右消耗率大ナル七種類ノ電球ナリ從テ電球サヘ其ノ都度換裝セバ概ネ四一五〇時間位連續使用可能ナリト認メテ實際上

一 臺ノミニテ何等支障ナシ

三 水中聽音機及水中探信儀(潜航中ノミ使用)

水中聽音機ハ潜航中當時配員スルモ水中探信儀ハ其ノ性能及用途

66

0079

ニ鑄シ敵發見後記員ス

(註) 潜航中ハ普通電信當直ヲ撤スルヲ以テ電信員ノ主任務ハ聽

音機ナリ

(終)

67

0080

0081

ニ歸シ敵發見後記員ス一ホハ以テ電報員ノ主任務ハ聽
(註) 潜航中ハ普通電信當直ヲ繼スルヲ以テ電信員ノ主任務ハ聽
音機ナリ (終)

0080

0081